

## 学部シラバスに関する学生の意見

太田武夫 下石靖昭 東 義晴 一村光子 遠藤 浩 岡崎愉加

### 要 約

1995年4月に初めての本学のシラバス(講義要覧)が発行され, 学生に配布された。本報は約1年後の1996年2月の試験期間中にシラバスに対する学生の意見を問うために行われたアンケート調査の結果をまとめたものである。回答を寄せた学生は435人で, 在籍学生の89.0%であった。よく利用したとする学生は18.2%, 数回利用したとする学生は67.6%であった。学生の使用目的はテストの準備や履修科目の決定のためであった。以上のことから, 現在のシラバスは学生が日常的により活用するためにはさらに教師が改善, 工夫する必要があると思われた。

キーワード: シラバス, 授業計画, 講義要覧, 学生の意見

### はじめに

1991年の大学審議会による答申「大学教育の改善について」の中では, 種々の提案の一つとして授業計画(シラバス)の作成・公表が挙げられている。

本学では1994年秋にこのための作成委員会が発足し, 試験的にシラバスを作成して教員間の意見交換を行った。これをもとに1995年度より, B5版約290ページからなる講義要覧(シラバスという名も併記。以下シラバスという)を作成し, 全学生へ配布した。そして1年を経た段階で, 今後の参考にするための全学生を対象としたアンケート調査を行い, 学生の利用状況の把握とシラバスに対する評価について検討を行った。本報はその調査結果をまとめたものである。

### 方 法

1996年, 2月に行われた後期試験の際に, 全学生を対象にして, 自記式アンケートを行った。調査内容は利用頻度, 見た範囲, 利用の目的, 各項目に対する評価など14項目から成り, 回答にはいくつかの選択肢を設けて選択させた。なお専攻科

20名の結果については本報では除外した。

### 結 果

回答者数は表1に示すとおりで, 合計435人であった。在籍学生数(休学中の者を除く)489人に対する割合は89.0%で, 診療放射線技術学科2年生の75.0%を除いて80%を越えており, これにより得られる意見はほぼ学生の総意と考えていいと思われる。利用の状況を学年別に見た結果は表2に示したとおりで「よく利用した」及び「数回利用した」を合わせると, 1, 2年生においてはそれ

表1 回答者数

学 科	看 護	診療放射線	衛生技術	学年合計
1年生	80 (100.0)	41 (80.4)	41 (82.0)	162 (89.5)
2年生	76 (95.0)	36 (75.0)	33 (94.3)	145 (89.0)
3年生	67 (83.8)	27 (93.1)	34 (94.4)	128 (88.3)
学科合計	223 (92.9)	104 (81.3)	108 (89.3)	435 (89.0)

( )内は回収率%

岡山大学医療技術短期大学部シラバス作成委員会

ぞれ98.2%, 93.7%であった。見た範囲について学年別にみると、表3のとおりで1～3年生を通じて、必要に応じてよく利用されていることが分かる。

表2 利用状況

学 年	よく利用した	数回利用した	利用しなかった	無回答
1年生	44(27.2)	115(71.0)	1(0.6)	2(1.2)
2年生	34(23.4)	102(70.3)	7(4.8)	2(1.4)
3年生	1(0.8)	77(60.2)	48(37.5)	2(1.6)
合計435	79(18.2)	294(67.6)	56(12.9)	6(1.4)

( )内は%

シラバスを何のために利用しているかを、全回答者の合計で多い順に並べると表4のとおりであった。予習、復習については利用度が低いのが特徴的である。さらにこの内容を学年別に見ると、項目によってかなりの相違が見られる。例えば、「履修届のため」については全学年ともに同程度に活用されているが、「選択科目を決めるため」、「出席の重要性を知るため」、「教官の人柄を知るため」といった項目は1年生において高い。また「教科書を知るため」、「参考書を知るため」、「講義の予習復習のため」は2年生において高くなるなど、学年による違いが見られるのは興味深い。

表3 見た範囲

学 年	必要な科目のみ	他の科目も少し	ほぼ全科目	無回答
1年生	93(57.4)	32(19.8)	37(22.8)	0
2年生	87(60.0)	23(15.9)	31(21.4)	4(2.8)
3年生	93(72.7)	12(9.4)	8(6.3)	15(11.7)
合計435	273(62.8)	67(15.4)	76(17.5)	19(4.4)

( )内は%

表4 利用の目的

	1年生162人	2年生145人	3年生128人	合計435人
テスト対策のため	120(74.1)	106(73.1)	18(14.1)	244(56.1)
履修届のため	94(58.0)	51(35.2)	51(39.8)	196(45.1)
教科書を知るため	71(43.8)	94(64.8)	29(22.7)	194(44.6)
選択科目を決めるため	85(52.5)	30(20.7)	21(16.4)	136(31.3)
出席の重要性を知るため	82(50.6)	36(24.8)	9(7.0)	127(29.2)
実習の準備のため	27(16.7)	42(29.0)	39(30.5)	108(24.8)
参考書を知るため	41(25.3)	53(36.6)	11(8.6)	105(24.1)
教官の人柄を知るため	64(39.5)	19(13.1)	12(9.4)	95(21.8)
講義の予習復習のため	21(13.0)	41(28.3)	13(10.2)	75(17.2)

( )内は%

記載項目についての学生の評価は表5に示したとおりであった。項目別に見ると「評価の方法」について「役に立つ」とするものが最も多かったが、67.6%にとどまった。

表5 記載項目の評価

	十分である	不足している	多すぎる	無回答
記載項目数				
1年生	129(79.6)	28(17.3)	0(0)	5(3.1)
2年生	119(82.1)	23(15.9)	1(0.7)	2(1.4)
3年生	99(77.3)	13(10.2)	1(0.7)	15(11.7)
合計435	347(80.0)	64(14.7)	2(0.5)	22(5.1)

( )内は%

表6 項目別評価

	役に立つ	どちらでもない	役に立たない	無回答
授業の目標及び概要	214(49.2)	183(42.1)	21(4.8)	17(3.9)
授業計画	245(56.3)	154(35.4)	24(5.5)	12(2.8)
授業の進め方	230(52.9)	164(37.7)	29(6.7)	12(2.8)
評価の方法	294(67.6)	117(26.9)	12(2.8)	12(2.8)

( )内は%

表7 記載内容の評価

	これでよい	もっと詳しく	もっと簡単に	無回答
記載項目数				
1年生	102(63.0)	46(28.4)	12(7.4)	2(1.2)
2年生	101(69.7)	35(24.1)	6(4.1)	3(2.1)
3年生	86(67.2)	17(13.3)	8(6.3)	17(13.3)
合計435	289(66.4)	98(22.5)	26(6.0)	22(5.1)

( )内は%

### 考 察

1991年の大学審議会の答申に基づいて大学設置基準の一部改正が行われた。この改正の中心的な理由は、学部段階の教育課程の編成を「自由化」することにあるとされる<sup>2)</sup>。これに伴って、その後全国的に教養教育改革、専門教育の改革、教授方法等の改善が進められてきている。シラバスの作成・公表は教授方法等の改善に位置づけられるものであるが、1992年には80大学で発行していたものが、1994年には176校と急激に増加しており、内容もより詳細になってきていると報告されている<sup>2,3)</sup>。短期大学においても、1994年10月現在で1228校中698学科(56.8%)で組織的に作成しており、その内訳は国立39.4%、公立34.2%、私立59.5%となっている<sup>4)</sup>。しかし、それぞれのシラバスそのものに対する学生の意見をまとめた報告は未だ

見あたらない。歴史が浅いこともあろうが、おそらくそれぞれの自己評価のなかで言及されているものと思われる。

本学のシラバスは、前述のごとく1994年にまず試験的に発行し、教員間でのみ点検、使用している。それは、まだこのシステムに馴染んでいない教員の関心を高めるとともに、自己及び相互点検を通じて、授業の改善を計ることと、シラバスの内容をどの程度にするかの意見をまず求めるためであった<sup>1)</sup>。このような段階を経て発行するというのは、おそらく全国的にみても珍しいのではないと思われるが、この教員の意見のまとめは既に報告しているとおりである<sup>2)</sup>。現在のシラバスのスタイルはこれをもとに決定されており、学生の意見を求めるのは今回が最初である。

### 1. 利用状況

今回の利用状況及び見た範囲の調査結果からは、シラバスは1、2年生においては必要に応じてよく活用されていると思われる。3年生において利用度が減少するのは、この最終学年時には授業は主として臨床実習及び研究に費やされるため、シラバスよりも実習の手引きや別に手渡される計画書を参考にすることが多いためであるといえる。そこで「利用しなかった」とするものの率を3年生の学科別に見ると看護学科52.2%、診療放射線技術学科33.3%、衛生技術学科11.8%と学科による違いが見られた。事実、看護学科の3年生は臨床実習が他学科に比べて多く、実習手引きもより詳細な指示が示されていることを反映しているといえる。その意味で、3年生については別のスタイルを検討することも必要であろう。

1995年度のシラバスのサイズはB 5版465gで、最初のA 4版825gで発行した試験的シラバスに対する「大きく、重すぎる」、「不経済」という教員の少数意見の検討に基づいて小型、軽量化したものである。このサイズに対して90.8%の学生が不満はないとしており、その点も利用をしやすくしていると思われる。なおこのサイズに対して「大きい」とするものは32人(7.0%)、「小さい」とするもの2人(0.4%)であった。

また欄外肩部の講義番号については利用したと

するものが113人(26.0%)と少ないが、丁度この年より履修の事務処理が電算化され、既に申請用紙に科目や番号が記載されていて○を付ける方式に簡素化されていることが理由として大きいと考える。

また巻末の教員一覧についても、利用したとするものは96人(22.1%)と少なく、1年21.0%、2年24.8%、3年20.3%と学年間にも差が認められない。また利用したとするものの意見も、「便利である」とするもの46人(48.0%)であった。この一覧には教員の姓名の読み方、所属、電話番号が書かれているのみで、もう少し学生に情報を多くして活用価値のあるものにする必要があるのではないと思われる。そのためには映像が使用できたり、個々の教員が自由に記載できるインターネットのホームページを活用することがより有効かと思われる。

### 2. 利用目的

表4に結果の上位にある項目から見ると、学生は学期はじめの準備と試験準備によく活用していることがよく分かる。表2で数回利用したとするものが最も多いのも、このことを示しているものであろう。シラバスにはその都度利用しなければならない情報が少ないとも考えられ、今後の改善の一つの方向性を示している。また自由記入欄には記載どおりに授業をして欲しいとする者が結構あり、学生の日常的な点検が行われていることも、教員は知っておく必要がある。

### 3. 記載内容に対する意見

記載項目数については、これで「十分である」とするものが80%あり、「不足している」の14.7%と比較して、ほぼ学生のニーズを満たしているといえる。この点、平成6年の全国短大の調査結果と比較すると、本学で採用している項目は遜色ないと思われる。しかし表6に示されるように、記載各項目ごとの意見からは、「どちらともいえない」とするものの率が少なくなく、学年別に見てもほぼ全学年を通じた意見であった。この点から見れば、実質的に学生に役立っているかどうかなお検討すべき問題点が残る。

また記載内容についても「これでよい」とする

もの66.4%に対して、「もっと詳しく」とするものが22.5%あり、更に充実すべく努力する必要がある。これは単に記載を詳しくすればよしということに止まらず、これを利用してガイダンスなどを行ったり、ここにあげた参考図書を十分に活用させるように日常的な有効利用を計る努力が肝要ではないかと思われる。また学生が教官と接触するために、シラバスが媒介となるような工夫をすることも必要であろう。

現在、学生による授業評価も全国的に進められつつある。前報では本学の教官の意見としては、時期早尚という意見が強いことを述べた。荻谷<sup>5)</sup>が述べているように、学生の授業評価とシラバスは密接な関係がある。シラバスが普及している米国とは授業評価や予習するのが前提という授業の進め方の違いはあるが、シラバスが有効に利用されれば自ずと授業評価は教官から求めるようになるであろう。

その意味でもシラバスの活用の充実と学生に魅力あるものにする工夫を今後積極的に計る必要があると考える。

## む す び

本学学生によるシラバスの利用は1～2年生においてよく利用されている。しかし利用目的は主として学期はじめの準備と試験対策のためで、日常的な活用には至っていない。

教員はシラバスに従って授業を進めるとともに、シラバス中に授業の進行に必要な情報を盛り込み、コミュニケーションが活発になるよう努力する必要があると考える。

## 文 献

- 1) 太田武夫, 下石靖昭, 東 義晴, 遠藤 浩, 岡崎愉加: 学部シラバス作成に関する教官の意見. 岡大医短紀要, 5:1-8, 1994.
- 2) 文部省編: 我が国の文教政策. 2-94, 1996.
- 3) 国立大学協会編: 文化学術立国をめざして. 92-94, 国立大学協会, 東京, 1995.
- 4) 高島正夫(研究代表者): 短期大学改革の進展と将来展望, 58-59, 1995.
- 5) 荻谷剛彦: アメリカの大学・日本の大学. 132-154, 玉川大学出版部, 東京, 1992.

## A study on students' idears about the school syllabus

Takeo OHTA, Yasuaki SHIMOISHI, Yoshiharu AZUMA,  
Mituko ICHIMURA, Hiroshi ENDO, Yuka OKAZAKI

### **Abstract**

The first syllabus of the School was published and distributed to all of the students in April, 1995. Ten months later during the term examination, an opportunity arouse to question the students about their idears for the syllubus. A survery of all of the students was carried out and 435 students (89.0%) responded to it.

They generally utilized it well, especially to decide which subjects they will take, to find out about the textbooks that will be used, and how to prepare for the examination. However it was found not to be sufficient for their daily use.

Teachers therefore must make a greater effort in giving information about their lecture.

---

**Key words** : syllabus, student, use

---

School of Health Sciences, Okayama University